

萩浦天神社裏古墳

携帯電話無線中継基地局建設に伴う文化財調査報告書

前原市文化財報告書

第 73 集

2001

前原市教育委員会

序

前原市は、今から約二千年前、中国の歴史書である『魏志倭人伝』に記された「伊都國」の地であったことで知られており、その後も時代を問わず対外的に要衝の地となりました。

前原市教育委員会では、前原市内の豊富で貴重な文化財を、人類共有の財産として保護・保存し、広く活用して行くため、学校教育に限らず社会教育の場にも教材として活用するなど積極的に取り組んでおります。

本書で報告する埋蔵文化財発掘調査は携帯電話無線中継基地局建設に伴うもので、当初予想したように、古墳の発見されることとなり、萩浦地区の古代史をあきらかにするうえで、貴重な手掛かりとなる成果を得ることができました。

本報告はこれら貴重な調査成果を報告書としてまとめたものです。本書が当地の歴史を解明する上での一助となれば幸いです。

発掘調査にあたっては、作業工程や費用負担の面でご協力いただいた事業主のJーフォン九州株式会社をはじめとする関係のみなさんに対し、この場をお借りして、感謝申し上げます。

平成13年3月31日

前原市教育委員会
教育長 三崎利彦

例言

1. 本書は、福岡県前原市大字萩浦字宮ノ後241-2 に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査はJーフォン九州株式会社の手携電話無線中継基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査であり、前原市教育委員会が主体となって実施した。
3. 本書に掲載した実測図は瓜生秀文が実測・製図した。
4. 写真撮影は瓜生が行った。
5. 本書の執筆・編集は、瓜生が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 調査の記録	5
(1) 調査以前の踏査結果	5
(2) 立地と墳丘	7
(3) 墳丘築造方法	7
(4) 石室	7
(5) 地山整形面	12
(6) 出土遺物	12
IV. 小 結	13

挿 図 目 次

第1図	荻浦天神社裏古墳の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)	3
第2図	荻浦天神社裏古墳周辺の地形 (1/5,000)	4
第3図	荻浦天神社裏古墳調査前地形図 (1/200)	6
第4図	荻浦天神社裏古墳墳丘残存状況図 (1/75)	8
第5図	荻浦天神社裏古墳墳丘土層断面図 (1/50)	9
第6図	荻浦天神社裏古墳石室実測図 (1/20)	10
第7図	荻浦天神社裏古墳地山整形状況図 (1/75)	11
第8図	荻浦天神社裏古墳周溝内出土遺物実測図 (1/2)	12

図 版 目 次

図版 1.	a 荻浦天神社裏古墳調査前状況 (南より)
	b 荻浦天神社裏古墳墳丘検出状況 (東より)
図版 2	a 荻浦天神社裏古墳東西方向墳丘土層断面 (北より)
	b 荻浦天神社裏古墳東西方向墳丘土層断面 (北より)
	c 荻浦天神社裏古墳南北方向墳丘土層断面 (西より)
図版 3	a 荻浦天神社裏古墳石室 (南より)
	b 荻浦天神社裏古墳石室 (北より)
図版 4	a 荻浦天神社裏古墳墳丘残存状況 (東より)
	b 荻浦天神社裏古墳周溝内出土遺物

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

糸島地方は福岡都市圏のベッドタウンとして人口増加が続き、福岡市営地下鉄とＪＲ筑肥線の相互乗り入れによる交通の利便化によってその流れに弾みがつくこととなった。糸島地方の中核都市の前原町は1990年の国勢調査で人口5万人を越え、翌年10月には前原町から前原市へと生まれ変わることになる。さらに、今宿バイパスの開通、ＪＲ筑肥線の後線化などの福岡都市圏との交通手段のさらなる利便化がはかられ、人口増加の波は前原市の中心部のみならず郊外に位置する萩浦地区にもおよんでいる。

本調査地（福岡県前原市大字萩浦字宮ノ後241-2）は1958年から始まった萩浦地区の土地区画整備事業の際、保存緑地となっていたのであるが、2000年5月にＪーフォン九州株式会社より携帯電話無線中継基地局建設計画が作成され、当該地における埋蔵文化財発掘届が提出された。

これを受けて、建設予定地内を踏査した結果、古墳の石室の一部と想定される石組みが地表で確認できたため、掘出者へ遺跡の存在を報告し、事業計画の変更が不可能な場合は発掘調査が必要であることを告げた。協議の結果、発掘調査を実施することとなり、その費用も掘出者が全額負担することで合意した。

以上、調査にいたるまでの経過について概略を記した。なお、Ｊーフォン九州株式会社の各位には、多大なる御理解をいただき、その厚意に深く謝意を表すものである。

2. 調査の組織

萩浦天神社裏古墳の発掘調査期間は2000年7月24日から2000年8月30日まで実施し、その後は出土遺物および図面・写真等の整理を行った。なお、発掘調査に伴う組織の構成は次のとおりである。

調査主体	前原市教育委員会	
担 当	教育部・文化課	
総 括	教育長	三嶋利彦
	教育部長	有田種之
	文化課課長	松井 昇
	文化課係長	林 覚
庶 務	文化振興係長	藤井正信
調 査	文化課主査	瓜生秀文
調査・整理作業員		

大島小夜、小金丸敷雄、川上久美子、川上巻子、立山ミヨ子、中田朋子
藤木和子、溝口英太郎、溝口ヨシノ、末益真奈美、榎崎尚子

II. 位置と環境

荻浦地区は福岡県前原市の北東部に位置する。糸島半島の西基部を挟るように入り込んだ加布里湾の最奥部から若干東側に入った地点である。荻浦集落の南背後に残った丘陵地の最も北側に張り出した部分に荻浦天神社裏古墳は所在する。

荻浦天神社裏古墳から北側に目を向けると、「筑紫富士」の異名をとる可也山（標高365 m）がまず最初に視界に入る。この可也山は古くは『万葉集』に歌われた。また、時代は下るが江戸時代に日光東照宮が建立される。その際、福岡藩主黒田長政は石華表（鳥居）を奇進したのであるが、その石材がこの可也山の石切り場（小金丸地区）から切り出されている。

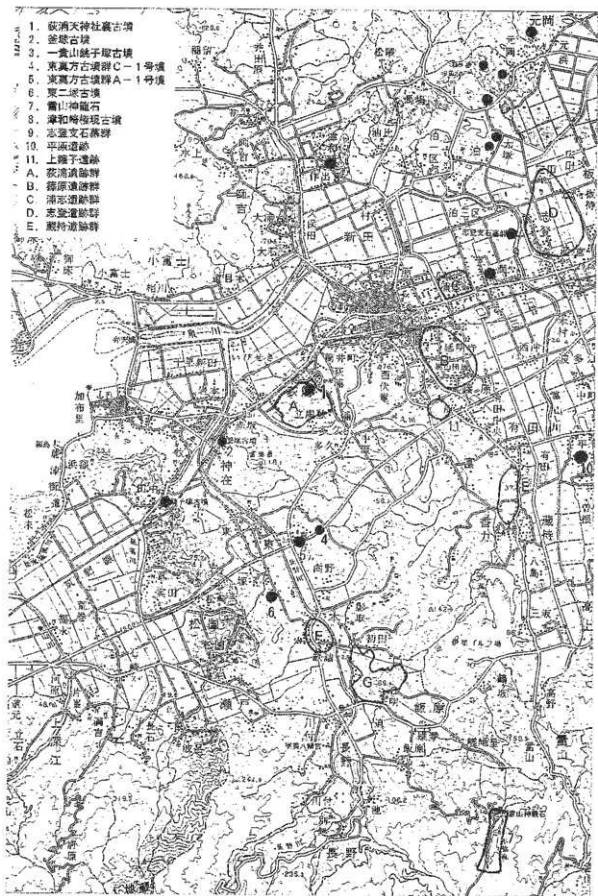
その可也山と荻浦地区の間は東西方向に標高2.5 m～5 mの低湿地帯となっており、低湿地帯は帯状に糸島半島基部を縦断している。この低湿地帯にはかつて加布里から今津に抜ける狭い海峡（糸島水道）があったと考えられていた。しかし、貝化石層の分布調査の結果、遅くとも縄文後期以降では前原市の泊～志登は陸地として繋がっていた可能性が高いことが報告されている。奈良時代において遣新羅使・遣唐使も「唐泊」で3日以上も風待ちしてから糸島半島を廻って「引津泊」まで航行している。刀伊の入寇（1019年）の際、刀伊賊を追撃した日本軍（大宰府軍）の水軍も陸軍より先に出発して糸島半島を廻って船越津で合流している。このことから糸島水道の存在に関しては検討の余地がある。

次は、荻浦天神社裏古墳から東側に目を向けることにする。当該古墳の東側も丘陵部であり、古墳～近世にいたる多数の墳墓遺構が調査されている。その丘陵部の東側には平野部が広がり、志登遺跡群などの遺跡群が多く分布する。

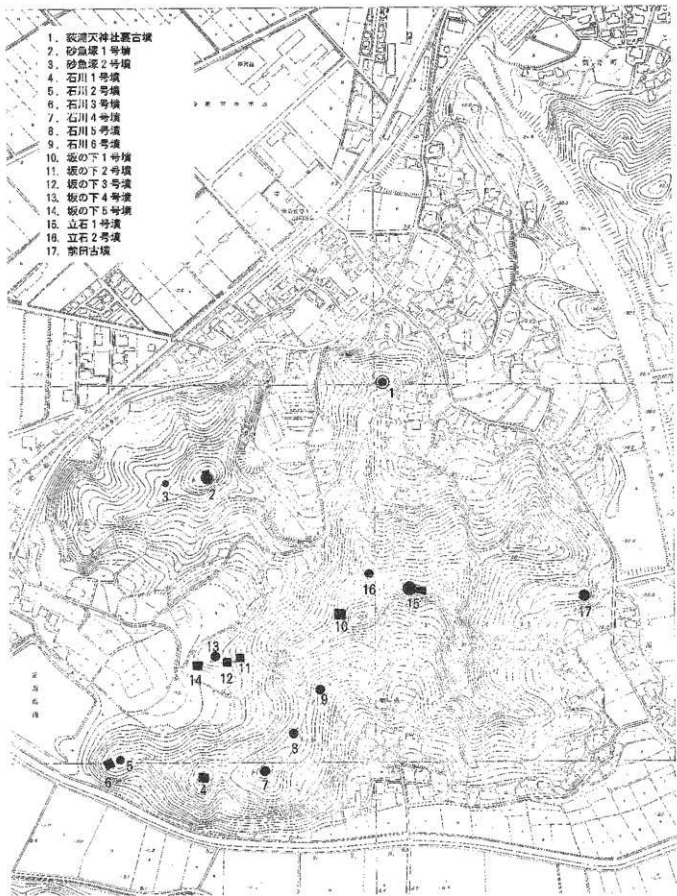
最後に、荻浦天神社裏古墳から西側に目を向けることにする。荻浦の南西1 km、加布里湾に注ぎこむ長野川の旧河口左岸には釜塚古墳（円墳、径58m）が所在する。さらにその南西500 m右岸には一貴山鏡子塚古墳（前方後円墳、全長103 m）が所在する。いずれも糸島地方を代表する大型古墳であり、両古墳が長野川の旧河口を挟んで両岸に所在することは当地一帯が対外交渉の重要拠点であったことを意味する。筑紫君磐井の乱後、肥後地方を本拠地とする肥後一族が後の志摩郡に進出するが、その際に付属勢力を伴っていた。その付属勢力は肥後地方（後の肥後国飽田郡一帯）から加布里周辺の海岸部（後の怡土郡飽田郷一帯）に移住している。この移住は朝鮮半島への渡海を前提としたものと考えられることから、加布里から長野川の旧河口一帯は対外交渉の重要拠点であったことを物語る。

参考文献

1. 「明良洪範 五」および『竹森家記 全』
2. 下山正一他「糸島低地帯の完新統および貝化石集団」（九州大学理学部研究報告）地質学 14-4・1986年）
3. 『朝野群載』寛仁三年四月十六日の大宰府解
4. 石山 勲『釜塚』前原町文化財調査報告書・第5集・1981年
5. 小林行雄『福岡県一貴山鏡子塚古墳の研究』・1952年



第1図 菟浦天神社裏古墳の位置と周辺の道跡 (1/50,000)
 (太線の囲みは主要遺跡群もしくは遺跡、●は墳墓を示す。)



第2図 萩浦天神社裏古墳周辺の地形 (1/5,000)

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の概要

発掘調査対象地（福岡県前原市大字萩浦字宮ノ後241-2）は萩浦集落の南背後に残った丘陵地の最も北側に張り出した部分に位置する。当該地は1988年からはじまった萩浦地区の土地区画整備事業の際、保存緑地となっていたのであるが、予想以上に後世の削平を受けており、遺構の残存状況は悪かった。発掘調査対象地の踏査の結果、この萩浦天神社裏古墳は円墳であり、玄室は横穴式石室であることは予想がついていた。そこでまず最初に、石室内を清掃して、石室の主軸を設定した。次に、墳丘部に幅50cmのトレンチを設定して、遺構の検出を行った。

2. 調査の記録

(1) 調査以前の踏査結果（第3図、図版1-a）

発掘調査対象地（福岡県前原市大字萩浦字宮ノ後241-2）は萩浦地区の土地区画整備事業の際、保存緑地となっていた。そのことをふまえて当該地を踏査した。

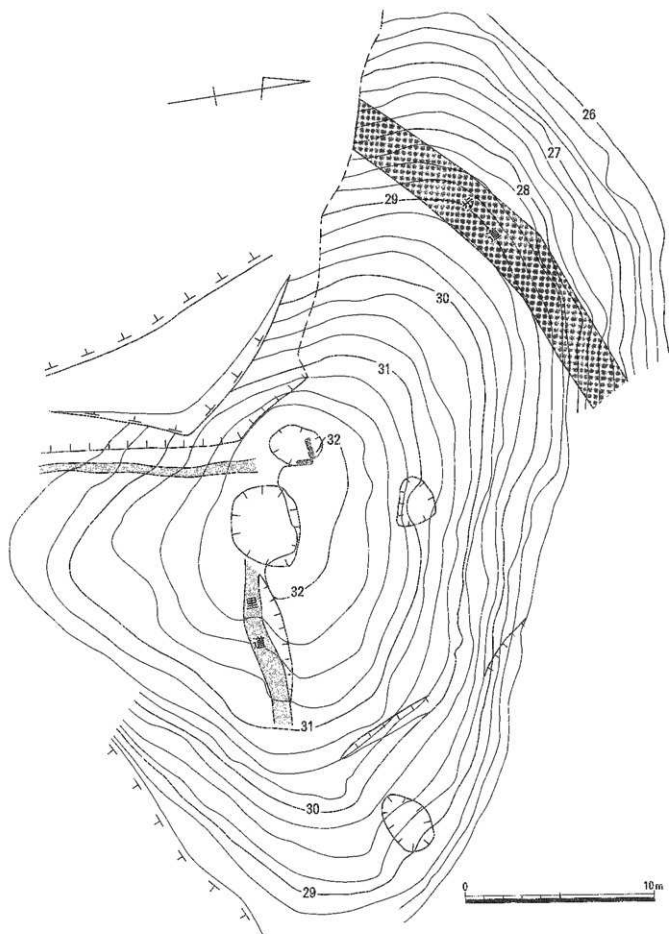
丘陵の下部から頂上部に向かってとってみると、かなり大きい古墳（円墳）と感じられた。しかし、丘陵の頂上部に立ってみると丘陵の下部から見たようには実感できなかった。当初、目の錯覚かと思い、何度も丘陵の頂上部と下部を上り下りしてそのことを確認した。しかし、結果は同じであった。この古墳は下からの視覚的効果をかなり意識して当該地に選地され、築造されていることがわかった。

踏査の際、まず最初に視界に入ったのが、石室の一部と想定される石組であった。表面観察では2～3個しかなかった。石が組まれている状況からすぐに石室の一部と想定できた。さらに他の石室がないか周辺を探してみた。その結果、墳丘部に岩簾などは確認できるものの、ほとんど石室の石材らしき石組みは確認できなかった。その状況からしてこの古墳には一つの石室が設置されていたことが予想された。ただし、石組みの残存状況から、石室は後世（時期不明）の擾乱、削平をかなり受けていることが予想された。

墳丘は表面観察では後世の擾乱、削平などがほとんどみられないように感じられた。しかし、石組み（石室）の残存状況を考慮に入れると墳丘もかなり後世（時期不明）の擾乱、削平を受けていることは予想された。

踏査の際、石組み（石室）の内部から多数の近・現代の陶磁器片などが表探できた。後世（時期不明）の擾乱、削平の際に不燃ゴミとして石組み（石室）の内部に投棄されたのであろう。

墳丘および石組み（石室）の内部から確実にこの古墳に伴うと考えられる須恵器、土師器などの遺物は何も表探できなかった。



第3圖 萩浦天神社裏古墳調査前地形圖 (1/200)

(2) 立地と墳丘 (第4図、図版1-b)

荻浦天神社裏古墳は荻浦集落の南背後に残った丘陵地の最も北側に張り出した部分の頂部(標高約32m)に築造された古墳である。

まずはじめに腐葉土を除去した。その結果、その下層からは、後世(時期不明)の堆積層を検出した。後世(時期不明)の堆積層は1層あって、その下層に墳丘の盛土が姿を現した。同時に周溝の埋土層も姿を現し、これを完掘しこの円墳の墳丘の裾部を確定し得た。

周溝は現存幅0.8 m~1 mを測り、深さは0.2 m~0.4 mを測る。丘陵の頂に近いほどより深く現存していた。その周溝内からは須恵器片2点が出土している。

以上の結果から、この荻浦天神社裏古墳は墳丘径約6 mを測る円墳であることがわかった。

なお、墳丘は後世の攪乱を予想以上に受けており、わずかに1層分しか検出できなかった。また、墳丘から築造時期を決定する遺物は出土しなかった。

(3) 墳丘築造方法 (第5図、図版2-a, b, c)

土層観察の結果、この古墳の墳丘は地山整形の後、盛土を施して墳丘部を構築していることがわかった。

また、石室の奥石および側石の墳丘側に掘り型を確認している。このことからこの古墳は、①ある程度地山整形面に盛土を施して墳丘を構築する→②その後、石室を設置するためのスペース(掘り方)を墳丘部の一部を掘削して形成する→③そのスペース(掘り方)に奥石を設置するという工程で構築されたことがわかる。その後の工程については、墳丘の残存状況から明確な結論を出すことは難しい。従って、石室を設置した後の工程については推測の域をでないが、石室を覆い隠すようにさらなる盛土を実施し、墳丘を整えてこの古墳を完成したと考えることができる。

(4) 石室 (第6図、図版3-a, b)

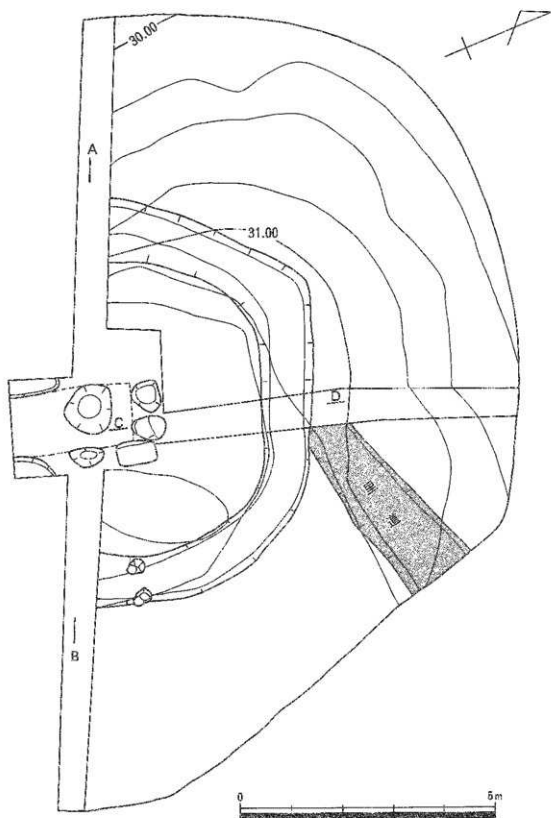
石室はN-30°-Eに主軸をとり西に開口する竪穴式石室である。踏査の際に予想した以上に後世の攪乱を受けており、奥壁腰石と側石腰石の計2個のみ残存している有様であった。あまりにも残存状況が悪く、調査当初、石室の主軸を確定するのに、困難を極めた。やっとのことで検出し得た側石腰石の抜き取り跡も10cmに満たなかった。

床面もかなり攪乱を受けており、敷き石などは全く検出されず、そのみか、床面の中央部には長径1 m×短径0.8 mを測る楕円形の攪乱跡も確認され、後世の攪乱の程度が伺われた。

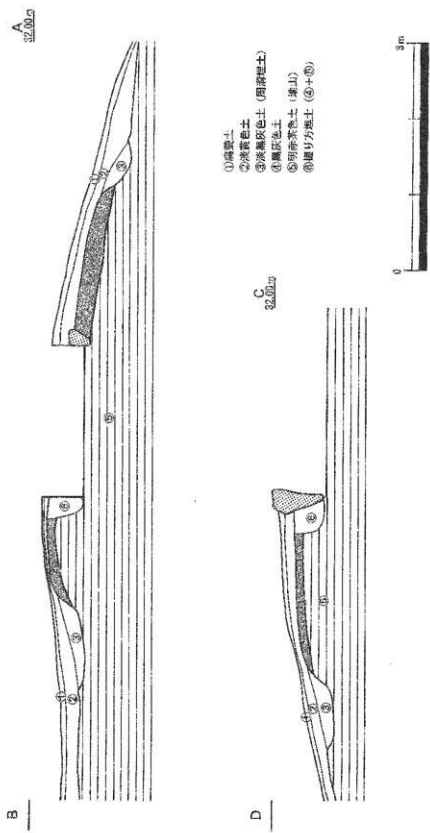
発掘調査地の制約のため、石室の全長については不明である。しかし、現存していた奥壁腰石と側石腰石、そして側石腰石の抜き取り跡との位置関係から少なくとも床面幅約1.2 mを測る石室であったことは明らかである。

石室の掘り方は、墳丘部の地山整形面から約50cmくらい地山を掘削して形成されており、その後奥壁腰石・側石腰石などを設置して石室が構築されている。

石室から土師器細片数点が出土した。しかし、残念なことに細片のため、復元することは不可能

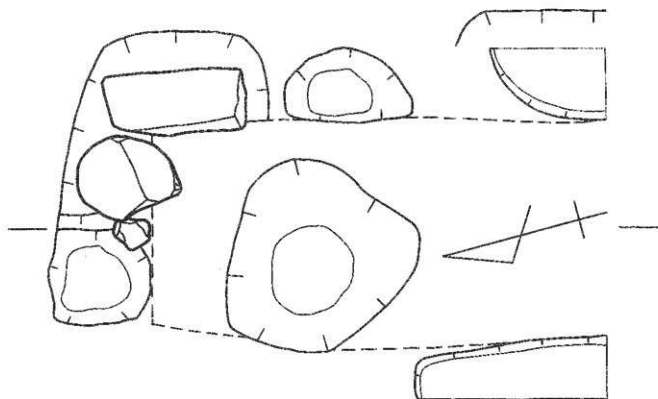
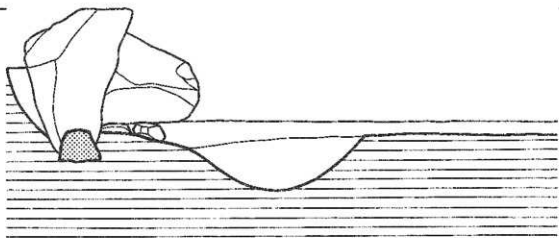


第4圖 荻浦天神社墓古墳墳丘残存状況 (1/75)

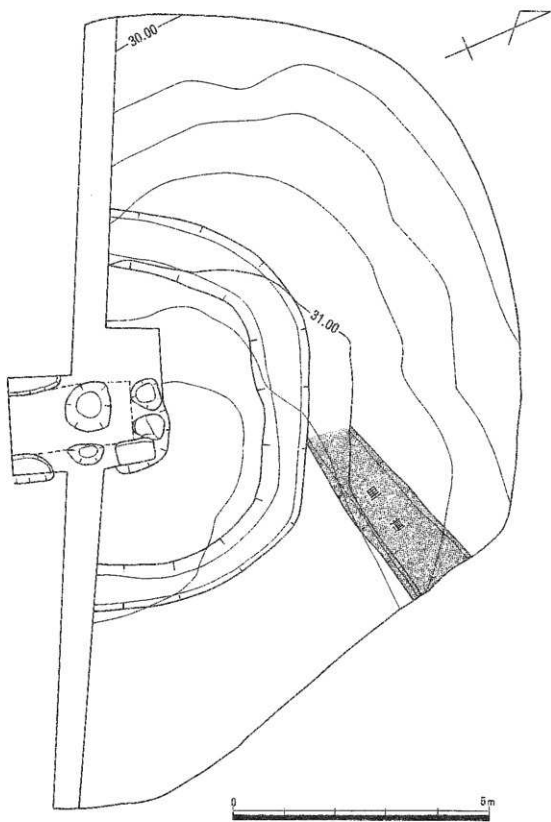


第5図 秋清天神社墓古墳填丘土層断面図 (1/50)

32.00m



第6圖 狹浦天神社裏古墳石室実測圖 (1/20)



第7圖 萩浦天神社墓古墳地山形狀況圖 (1/75)

であり、時期も不明である。

(5) 地山整形面 (第7図、図版4-a)

七層観察の結果、築造当時の墳丘は1層しか残っていない有様であった。その1層分の墳丘を掘削して、地山整形面を検出した。

地山整形面を検出した結果、残存していた奥壁石・側石・石の墳丘側に石材を設置するための掘り方を検出した。石材の外郭線に帯状に沿った幅約20cm、深さ約40cmを測る掘り方である。

地山整形面からの出土遺物はなかった。

(6) 出土遺物 (第8図、図版4-b)

周溝内から土器片2点が出土した。

1は土師器の高杯の口縁部である。復元口径6.4cmを測る。色調は内外面ともに赤茶色を呈する。焼成は良好である。調整は風化が著しく、不明である。ミニチュア土器の可能性はある。

2は高台付須恵器の杯身の底部である。復元高台径6cmを測る。色調は淡褐色を呈する。焼成は良好である。外面は高台の接合後、丁寧なヨコナデが施されている。内面もヨコナデが施されているが、一部に指頭痕が残る。

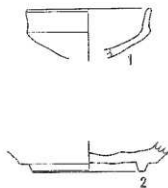
1の土師器の高杯は残存状況が悪いため、時期は不明である。2の高台付須恵器の杯身の底部はその高台の形状から8世紀前半から8世紀中頃の時期が与えられよう。

この古墳が築造された後、墳丘部に律令期の火葬墓などが新たに構築されたのであろう。その律令期の火葬墓などの遺構が後世(時期不明)に削平され、その遺物の一部がこの古墳の周溝に流れ込んだことが想定される。

従って、上記2点の土器片はこの古墳に隣実に伴うものとは判断し難い。

なお、石室の内部より土師器片数点が出土している。

しかし、この土師器片もこの古墳に確実に伴うものとは判断し難い。また、あまりにも細片であったため、図示し得なかった。



第8図 萩浦天神社墓古墳周溝内出土遺物測定図 (1/2)

IV. 小結

今回の調査は調査範囲が限定され、また、遺構の残存状況も悪かったため、明確な結論を出すことは難しい。しかし、ここでは敢えて今回の調査結果をもとに荻浦天神社裏古墳について総括してみたいと思う。

まず、この古墳の立地条件であるが、丘陵部の北側に最も張り出している部分に位置している。そのため、古墳の上からの眺望のみならず、下から見る古墳の姿もすばらしかったことが想定される。この古墳の築造当者はかなり視覚的効果を考慮に入れて、当該地に選地し、この荻浦天神社裏古墳を築造したのであろう。

復元墳丘径約6mと推定されるこの円墳の墳丘は残念なことに後世（時期不明）の攪乱、削平を受け、かなり削平されていた。残っていたのはわずか1層だけであったのであるが、それでも踏査の際に墳丘がかなり残存しているような錯覚に陥ったのはこの古墳の立地条件によるところであろう。その墳丘であるが、構築の工程としては①地山整形形→②盛土工事の順番で実施していることがわかった。石室はある程度墳丘ができてから墳丘を掘削して設置されており、次の工程として石室を覆い隠すようにさらなる墳丘が形成されこの古墳が完成したことも想定できる。

石室も踏査の段階でかなり後世（時期不明）の攪乱、削平を受けていたことは予想できたが、実際に調査を実施してみると予想以上に攪乱、削平を受けていたことがわかった。発掘調査地の制約のため石室の長さは確認できなかったものの、調査の結果、床面幅約1.2mを測る横穴式石室であることは確認できた。

ただし、墳丘・周溝・石室からは確実にこの古墳に伴うとみられる土器などは出土していない。そのため、出土遺物から古墳の築造時期を明確にすることはできなかった。

しかし、今回の調査結果のなかで唯一築造当時の様子を伝えるものに横穴式石室がある。その石室の掘り方は墳丘部の地山整形面から約50cmくらい地山を掘削して形成している。その後奥壁石・側石・側石などを設置して石室を構築している。この荻浦天神社裏古墳を荻浦遺跡群の一部と考えると、石室の規模および構築方法においては前田古墳と類似してくる。

前田古墳は、墳丘径が10m～10.5mを測る円墳である。墳丘は築造当初から本来屋根と墳丘が一体化するように盛土されていた可能性が高い。下から見上げた際に墳丘規模を視覚的により大きく見せる効果を狙っていたようである。玄室は単室右片袖式の横穴式石室である。玄室は長方形プランを呈し、法量は左側壁長さ2.0m、右側壁長さ2.4m、幅は羨道幅1.18m、奥壁側で1.3mを測る。玄室は地山を80cmほど長方形に掘り下げて基底部とし腰石をすえている。床面には白色と赤色の角礫が敷石として使用されていた。玄室内からは鉄製品、装身具、土器などが出土しており、その出土遺物から、追葬の時期は6世紀後半、築造はこれを超える段階に比定されている。

荻浦天神社裏古墳の石室からは確実にこの古墳に伴うとみられる遺物が出土していない。そのため推測の域を出ないが、前田古墳の石室の規模および構築方法（墳丘部地山整形面から約50cm～80cmくらいの深さほど長方形に掘り下げて基底部とし腰石一段分を掘る）と類似している点を考慮に入れて敢えて推測するならば、この荻浦天神社裏古墳も6世紀中頃から6世紀後半代に築造されたと考えられることができる。

荻浦遺跡群の古墳に限定して横穴式石室の構築方法を見ていくと、6世紀代においては後半に時期が下るにつれて石室の基底面は墳丘部の地山整形面よりかなり深くなり、使用する腰石も大きくなる傾向にある。この点からも、この荻浦天神社裏古墳は6世紀後半までに築造されたと考えることができる。

また、荻浦天神社裏古墳の周溝から須恵器片数点が出土している。このことから、かつてこの古墳の墳丘部には律令期の火葬墓などが所在していたことが想定される。その律令期の火葬墓などの遺構は後世（時期不明）の攪乱および削平を受けて消滅し、その遺物の一部が周溝内に埋没したのであろう。

以上、今回の発掘調査結果をもとに荻浦天神社裏古墳について総括してみた。前にも説明したように、調査範囲が限定されたために特に石室については十分に調査を実施したとは言い難い。しかし、荻浦遺跡群の古墳時代から律令期にかけての墓制の変遷を知る上での新たな情報を得られたという意味において今回の調査は十分に意義があったと思う。

今後、荻浦遺跡群を形成していった集団の調査・研究が必要になろう。その意味からも荻浦天神社裏古墳も含む荻浦遺跡群周辺におけるさらなる調査・研究に期するところである。

参考文献

岡部裕俊『荻浦』前原市文化財報告書・第58集・1995年

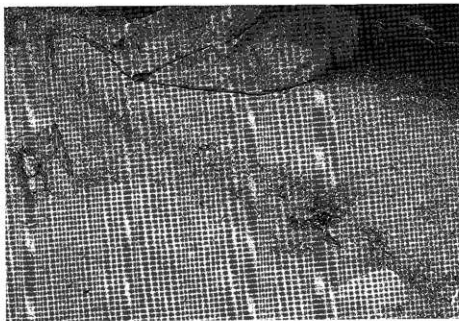
圖 版



a 萩浦天神社裏古墳調査前状況（南より）



b 萩浦天神社裏古墳墳丘検出状況（東より）



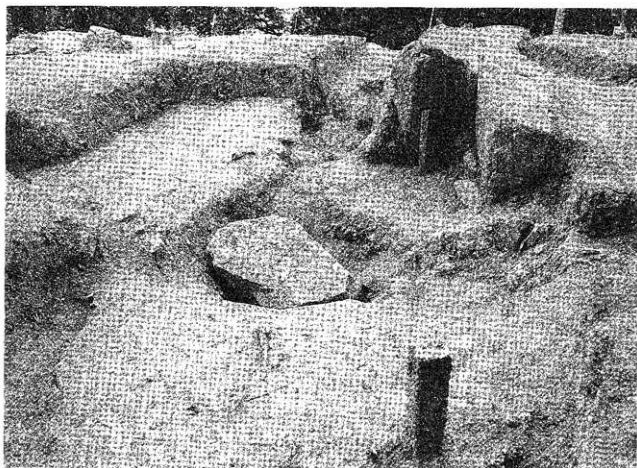
a 荻浦天神社裏古墳
東西方向墳丘土層断面
(北より)



b 荻浦天神社裏古墳
東西方向墳丘土層断面
(北より)



c 荻浦天神社裏古墳
南北方向墳丘土層断面
(西より)



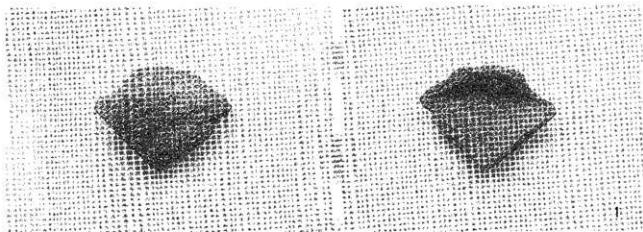
a 荻浦天神社裏古墳石室（南より）



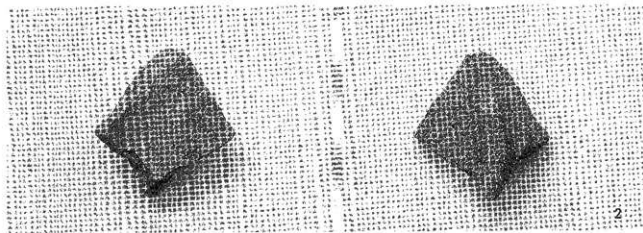
b 荻浦天神社裏古墳石室（北より）



a 荻浦天神社裏古墳墳丘残存状況（東より）



1



2

b 荻浦天神社裏古墳周溝内出土遺物

調 査 書 抄 録

フリガナ	オギノウラテンジンシャウラコファン							
書名	荻浦天神社裏古墳							
副書名	携帯電話無線中継基地局建設に伴う文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第73集							
著者名	瓜生 秀文							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	福岡県前原市前原西一丁目1番1号							
発行年月日	2001年3月31日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
荻浦天神社裏古墳	前原市大字 荻浦字宮ノ 後241-2			33° 32' 51"	130° 11' 32"	2000.7.24 ～ 2000.8.30	200	携帯電話 無線中継 基地局建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
荻浦天神社裏古墳	墳墓	古墳時代		円墳		土師器、須恵器		

荻浦天神社裏古墳

前原市文化財調査報告書 第73号
2001年3月31日

発行 前原市教育委員会
前原市前原西一丁目1番1号
印刷 松古堂印刷所
福岡市西区周船寺1丁目7-64

